
未来に夢見る(ウハイ & シン)

ミニヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

未来に夢見る（ウハイ&シン）

【Nコード】

N1534B

【作者名】

ミニヤ

【あらすじ】

遊牧民の恋愛って難しいです。強い男性の子供を生む、と言うような子孫繁栄的なものも強いようですが、一応、基本的に遊牧民の結婚は族外婚で、血を濃くしない為に（性格異常者や奇形児が生まれる確率が高くなる為。）同じ氏族の女性とは結婚しないそうです。

ベルンの奥地に、ある集団のアジトがある。その組織の名は<黒い牙>。

悪人を裁く組織として、民衆からはとても慕われていた。首領であるブレンダン・リーダスを初め

最初は片手にも満たない数しかいなかったのだが、人間同様、年を重ねるごとに構成員が増え、今では大集団となっている。

その義賊集団<黒い牙>の構成員であり、最古参のメンバーの一人であるウハイは、木の先に打ち付けられた太い釘を静かに眺めていた。

彼の歳は30辺り。サカの民族衣装を纏っているので一目でサカ人だと分かる。

茶色の髪を布で覆っていて、

精悍な顔つきに猛禽を思わすような鋭い目をしていて、顎には鬚をたくわえている。

彼が見つめるその釘は、

普段仲間のスナイパー達が簡単な訓練用にと打ちつけた的だった。ウハイからの距離は70メートル。

普通のスナイパーならば自信が相当揺らぐ距離だ。

だが、ウハイは依然として距離を縮めようとせずに弓を構える。

彼が現在いるのは周りを森に囲まれた、牙の人々の訓練用に作られた広場である。

ヒュン！

弓を放つ時独特の、鋭い音が響く。

今度は、近くにつないでいた馬に乗ると円を書くように走り、あくまでの距離を縮めず目標が見えた所で弓を再び放つ。

「ウハイ！」

矢を放つたと同時に、自分の名を呼ぶ声がした。

その瞬間に馬を操る速度を緩め、声がした方を見る。

鼻息を荒くする馬の鬣を撫でつつそちらを向くと、

二人の男が少しはなれたところに立っていた。

その姿を認めるや否や、ウハイは馬から軽々と下り、

慣れた手つきで近くの木に馬を繋いだ。

二人の男のうち、一人はすらりとした体格の長身の男で名前はロイド。

歳は20代後半ぐらい。とび色の髪に端正な顔、少々無精ひげを残している。

頭が切れていつでも冷静で、

剣の腕なら黒い牙の中でこの男に敵う者は首領を除いてはいない。

もう一人はこちらに向かつて手を振っている、

2メートルはあるうかと言う大男（自分の名を呼んだのはこの男だ。

）

名前はライナス、歳は20代前半で、

刈り込まれた茶色の髪に細面のハンサムな顔。

兄ロイドと違って豪快で少々荒っぽく力も強い

（純粋な力比べでは兄も敵わないだろう。）

だが、同じ位正義感が強く普段は陽気で面倒見のいい男である。

この二人こそ、黒い牙の首領であるブレンダン・リーダスの子供達なのである。

二人をまとめてリーダス兄弟と言う時もある。

「元気だったか？見せてもらったぜ。」

ライナスがからかうように言い、兄より一足先に自分に近寄ってくる。

今まで二人は何をしていたのだろうと思ったが、

義賊とは言っても仕事がない時は暇なもので、

自分達のように訓練をするか、街へ降りていたりもする。

だが、彼らと顔をあわせたのは仕事の関係で久しぶりだった。

「久し振りだな。先ほどの馬上弓技、相変わらず見事だ。」

いつの間に用意したのやら、

ロイドの方は双眼鏡を目に当ててウハイの放った矢の方角を見ている。

双眼鏡を下ろして再びウハイを見ると、感心したように一つ息をついた。

「草原の民は馬が足代わりだと聞いているが、

あんたの馬上弓技を拝見する度に思い知らされる。」

「普段、ああ言う訓練してるから弓の腕がすごいんだな。

馬に乗ってても、揺れなんか関係ねーみたいだしさ。」

ライナスはそう言って何度も頷く。

「・・・サカでは、

大抵2歳の頃から馬に括り付けられながら馬術を身につけさせられる。

それが蔵にまたがって生まれ、馬の背で育つと言われる所以だ。」

ロイドは肩を竦ませた。

「確かに、あのバランス感覚は同じサカの民以外誰にも真似出来ん。

」

「サカの馬はどの国の馬より速くて荒々しいので有名だけどよ、

そいつは大人しくてお前の言う事をちゃんと聞いて、よく慣れているな。」

ライナスが口を挟む。

サカの馬はサカホースと言われ、気性が荒く、

よほど慣れていないと近付く事さえ困難である。

だがウハイの馬は主人同様、静かな大人しい馬だった。

「馴らす、のではなく馴らし込むと言う方が正しい。

いかに主として自分を認めさせる事が出来るか。

・・それも、草原の民に必要な力だ。」

「成る程。」

ロイドが一つ頷く。

亡くなった母やウハイは、自分達によく故郷であるサカの話をしてくれた。

その時に野生馬を馴らす方法も聞いた。

その、優れた弓の腕を使い矢で馬の首の少し上、柔らかい部分をかすめる。

（ただし、ちよつとでも外れると馬は死ぬ。

だからサカの民でも余程弓の腕に長けていないと難しい。）

上手くかすめると馬は一時気を失い、倒れる。

そこで急いで馬の口を足を縄でしばりあげて捕らえるのだ。

ちなみに、サカの民は3時間ほどで馬を慣らすらしい。

無論、他の国の人間が同様の時間で馬を慣らすことは不可能に近い。ヒ、ヒ、ヒーン！！

突如、ウハイの馬がいなく。

同時に、リーダス兄弟は背後に人の気配を感じたので振り返る。

そこには20を少し過ぎた辺りであろうか、深緑の髪をなびかせ瘦せた体をした、

一目でサカの血を引いていると分かる娘が立っていた。

リーダス兄弟にとっては新顔だ。

娘はリーダス兄弟に戸惑っているのか、やや硬い表情である。

「・・・どうした。」

ウハイが娘に声をかける。すると娘は明らかに安心したようだった。

「あなたが、どうしているかと。」

「・・・そうか。」

「ウハイ、誰だよ？」

ライナスが不思議そうにウハイと娘を交互に見つめた。

「この前の狩りで、解放した人々の内の一人だ。」

ウハイがライナスに視線を戻し答えた。

ロイドはウハイの言葉で、彼が仕事を任されていたのを思い出した。

ウハイは「仕事」を「狩」という。

確かに人々を苦しめる貴族や役人、

商人を見つけて排除するのが自分達の仕事だから、
その方が理に適っているかもしれない。

「成る程。」

呟いてロイドは、娘に疑問を投げかけた。

「お前は、どこの部族だ？」

「クトラ。」

「クトラ？」

ライナスが呟き、首を傾げた。

それはサカの草原で生活している部族の名称の一つで、

中でもクトラ族と言うのは草原の三大部族の一つとして知られていた。

草原の外の民も、

クトラ族の族長であるく灰色の狼の事を噂に聞いて知っている程だ。

「三大部族の一つに属する人間が、何故人買いに捕まった？」

ロイドの言葉に娘が目を伏せた。

「水汲み、食べ物探しをする為に集落から離れた時、

敵部族の偵察兵に見つかってしまった。」

ロイドはそれで大体の事情を悟った。

草原でも部族同士の争いは日常茶飯事だ。

特に夜は、どの部族も見張りを立てて敵の来襲に備えていると聞く。
く草原の民」と一括りにしてしまいがちだが、部族により文化や風習も全く違う。

草原で暮らす遊牧民の中には大まかに分類して二つのタイプがある。
争いを好まない友好的な部族と、弱い部族を襲う好戦的な部族だ。
クトラ族は前者（であると噂で聞いている。）

恐らくこの娘を捕らえたのは後者の部族だったに違いない。

敵部族に掴まった者は、たいていその部族で奴隷として働かされる。

ただ、

他国と交流のある部族であれば、捕らえた捕虜を他国の人間に売る事がある。

「そうか・・・辛かっただろう。」

ロイドは一つため息をついた。

「辛くなかったと言えば嘘になるが。」

娘が言い、ロイドの目を見つめる。意思の強そうな切れ長の目、そして深緑の瞳だ。

「敵に捕らわれたのは自分の責任。私は、彼に救われただけ運がいい。」

そう言つて、ウハイに優しい目を向ける。

草原の民の生活は厳しい。自らの身は自分で守らなければならないのだ。

特に女子供は娘の言う通り（狩り以外の）

食料や薪、水の調達に行かねばならないが、いちいち護衛がつく訳ではない。

遠出した所で攫われれば、行方を確かめる術は無い。

「けどよ、」

ライナスが割り込んできた。

「草原が懐しいんじゃないか？」

家族や友人だっているだろ？ だったら草原に帰してやれば・・・」

「もう、何度もそう勧めた。」

「顔は見せに行くと言っている。でも・・・今は、あなたの側にいさせて貰う。」

娘はほんの少し怒ったように、だが毅然とした態度で言い切った。

「けどよ・・・。」

まだ何か言いかけたライナスにウハイが苦笑する。

「この通り、幾ら草原へ帰れと言っても聞かんのだ。」

それを聞いた娘が、無言で俯いて服の裾を握り締める。

ウハイが娘にちらりと目をやった。

「だが、今では食事の用意をしたり布を織ったり、故郷の話をしたり、時に歌を聞かせて和ませてくれる。．．．助けられている。」

その言葉で娘の顔がぱつと明るくなり、その様子を見ていたロイドは目を細めた。

「まあ、お互い迷惑でないのなら無理に草原に戻らせる事もあるまい。」

そついや自己紹介がまだだつたな。俺がロイド。」
ライナスを指差す。

「こつちが弟のライナス。」

「！では、あなた方が．．．。ウハイがよく話してくれた。」

「そつか。ま、宜しくな。」

ライナスが手を差し出すと、娘はそつと握り返してきた。だが突然、娘が何かを感じたようにライナスを見上げた。

「ん？」

「あなたと兄上は、草原の民？」

娘が、兄弟の顔を交互に見つめる。

「？ああ、母親がサカ人だからそうとも言えるかな。それが何か？」

ロイドの答えを聞いて、娘の顔に優しい笑みが浮かぶ。

「大丈夫、兄上とあなたには加護を感じる。」

決して、性質の悪いものに惑わされたりしない。」

そう言つて娘がロイドに手を差し出してきた。

「そりゃ、どうも。」

ロイドはその手を軽く握り返しながら答えて、もう一度よく娘を見つめる。

ウハイが側においているのなら、危険はない。

「加護??」

ライナスはまだ首を傾げている。

「ウハイ。俺達はこれから親父のところへ行つて来る、また後でな。」

「ああ。」

リーダー兄弟が去った後、
娘もウハイの訓練の邪魔をしないよう気遣ってかアジトの方へ戻って行った。

「なあ兄貴。」

父の所へ向かう途中、ライナスは兄に話しかける。

「どうした？」

「ウハイとあの娘、いい感じだと思わねえ？」

ロイドは二人の様子を思い出す。

ロイドから見て、娘の方は明らかにウハイに対して好意を抱いているようだった。

「そうかもな。」

「上手くいくといいよね」。草原の民の間には、
異国の民や異民族からはいい子が生まれるって伝承があるらしいぜ。
随分前にあいつに聞いたんだ。」

ライナスの言うあいつ、とは彼の妻の事である。彼女はサカとベル
ンの混血だ。

会ったことは数度だがサカの容姿が濃く出ており、
見た目にはサカの民とそう変わらない。

ライナスは彼女がどうしているかいつも気にかけているのだが、
さすがに（ほぼ）荒くれ者の集まりの集団の中に置く気にはなれない
のだろう。

（それは自分も同じで、妻と息子はアジトにはいない。）

彼女の元々の故郷であるブルガルにずっと住まわせている。

ちなみにブルガルと言う場所はサカの草原と面しており、

あまり豊かとはいえない土地であるが比較的平和で、

自分達が最も嫌う性悪な貴族もいない。

「確かにウハイはクトラ族ではないが・・・あの二人が上手く行く

とは限らんぞ?」

軽く揶揄するように言う。

「そりゃ、そうだけど……。」

でも、と続ける。

「上手く行ったとしてさ、うん、きっといい子が生まれるぜ。」

最後の方の言葉は、まるで自分に言い聞かせているようだった。

それでロイドは呆れながらも顔を綻ばせる。

ライナスも、もう少し時が経てば自分と同様父親になる。

きつと、ウハイ達の事を考えているうちに、

生まれ来る我が子の事を重ねたのだろう。

日が暮れて、星が点々と姿を現し始めた。

ウハイは住処に戻る事にした。

彼は黒い牙の構成員に割り当てられた部屋ではなく、

木とフェルトできており分解と組み立てが容易に行える、

草原に暮らす遊牧民にとっては必要不可欠なゲルで生活していた。

ちゃんとした部屋で暮らす事はもちろん出来るから、

必ずしもゲルを必要とする訳ではないが、

ウハイにとってはやはりここが一番落ち着けるのだった。

黒い牙の構成員の中に何人かいるサカの民は、

全員が一つ屋根の下と言う訳ではないが、彼同様ゲルで生活してい

る者が多い。

ウハイは自分のゲルに入りかけようとして足を止めた。

屋根に開いた穴の下で火を起こしているのか、ゲルが赤く光っている。

フェルトを通して、娘が布を繕っている影が見える。

そして小さい子供の影が、彼女の傍らに立っているのが見えた。

不思議に思い入り口の布を開いてみる。娘が顔を上げた。

だが、そこにはゲルの中心に赤々と燃えている火と、

彼女が床に座り繕い物をしているだけで他には誰もいない。

確かに子供の影が見えたのだが・・・と、ウハイは首を傾げた。

「お前・・・？誰かいたのではないのか？」

娘は全く動じた様子もなく、布を繕う手を止めて頷いた。

「ええ。子供の夢が来ていた。」

そう言つて微笑む。

「そうか・・・。」

不思議な娘だ、と思う。だが、決して嫌ではない。

「いつか・・・。」

「？」

「いつか、子供が授かると言う事だと思う。だから、名を考えていた。」

「つきたい名は見つかったか。」

「ええ。」

彼女が頷く。

「それは？」

「生まれた子が男でも女でも、シン・・・と。」

「シン？」

シンとは、サカの遊牧民達の間で信仰されている月の神の名前である。

「シンは月の神でもあるけれど、

私達クトラの間では同時に大地と大気の神と言われている。

だから、大地と大気の恩恵があるように。」

「そうか・・・シン、いい名だ。」

すると、娘がそつとウハイの胸に顔を押し付けて来た。

「恐い。」

娘が小さく呟く。

「何がだ？」

「狩りに行ったまま、あなたが戻らなかつたらどうすればいい。」
驚いて娘を見つめるが、

彼女がどのような表情をしているのか自分からは見えない。

だが、彼女の肩は微かに震えていた。

「前から言っている筈だ。クトラへ……。」

戻れ、と言いかけた時だった。

不意に、ウハイの目の前が赤く染まった。

何だろうとよく見ると、体中が血にまみれている。

「私はどうすればいいのでしょうか。」

「――！」

彼女の言葉ではっとして辺りを見るが、もちろん血など流れていない。

ウハイは、自らが穏やかな死を迎える事は無いだろうと常日頃から覚悟していた。

だとするとあれは、自分の未来だろうか。

娘が、いつそうしがみついて来た。

……温かい。

（後書き）

自分はシンスー好きです。ラスリンスー親子説も大好きです。ウハイ大好きです。今もかなりカッコイイですが、もう少し若い頃なんてそれこそモテまくりでは無いでしょうか。ブレンダンも同じように若い頃を想像してしまいます。ウハイ、戦闘会話もカッコ良かったです（特にリン）。もっと出番が欲しかったですね。これから色々なノーマルカプスや、親子交流SSを書いて行きたいなと思います。ここまで読んで下さりありがとうございました。気に入って頂けると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1534b/>

未来に夢見る(ウハイ&シン)

2010年10月28日05時46分発行